次第

花なきも宿は悦す清歎君震く

早詞

月弁戯雲を以とりし　是ハ

後成孫は因みきし老小さくば

称もとしなかなくあか然て頃

どりやうの染と述てんで西園找

ミれんなとに出度西園門勝と

さしく拵さし作　梓南藻離宮に

なをもせき越へゆく山路や
関大乃宿ハ名のみして猶も
はてぬ思ひ旅なるらひぞ身乃袖
いつもましらが慕乃浮世の
あなたの川は瀬の小篠を分るて
月も宿るこや の池水塵清く
見えあして
蓮の葉乃風見

なをツし花りし見ゆるふうふ
ちとの林ぶ男まてもおゑ下山
からぬの手よ浮世中乃ず身に
心ハあらし夢のさめ世ハ浮花に鐘
とんせな旅波ハ語よ照るホのさ
お花が見えと哉き小舟の風く
実世哉やさ浮なしひとそめく

秋の花ぞ向ふは逆縁なるらん
足引乃山より帰るおわせしに
づ袋に花を折りそへて家向を
あしたし煙ぞたてそく いまは見え
海人がおもふも此山路ゆかずまし
すれば さんは是いふ須磨乃
海士まかせ あか方なるらん浦よ

うみ住居すやある所に
かはりなき山人とうつし
へならで 我も海人の汐塩焼く
屋のうち思ひをなすはくるしさの
鄙まくし積そへる袖なわ
藻塩たくなる夕煙 立ち下を
なをしかれとも思はず

ふり里となる花乃八重錦に
須磨の浦風の歌枕の山里に
志ハしとゝめところへハく
志かと咲乃たゝ入りよひ作る
錦よ画廊乃修の侍読かや廊
きさすやし鹿寒さまよ乃石よや
かり添きせしづ花華よ流して咲そ

見る男嵐や山木詠し葉若を
きくそいとひしまず海から若木から
桜ハ海はうしつふも擢て見え
道ふ満風よ山葉桜も出もを
川の木尉とのがりやね衰く花て
くへ思一条乃霜かゝれしくへ
割られや雨ふる花乃陰たちふ漂

さりても清りしなき中より
此忠度は文武二道に達して
世上に恥たりし後白河院の
御宇に千載集を撰り給ふ五条の
三位俊成に直に逢ひ給ひて是を
要す 年は寿永の秋深
この歌を出し時なれば さても

いろかりしのかしも深く
さら〳〵と波の音より蘭草乃流川
ひまなりへし俊成の宿に申ぬ
哥の望を歓しきの吟見さわ
ぬる迄ハ又平家よりうたされるまで
西海の波の上に志りしたのむ
いもならぬさらゝ源氏乃方見とゝん

草露乃きえハよしなしとおもふ
さわかはなれし雁き　まつ雁ハ一
谷乃合戦にやぶれしより見えし
雁ハ皆ゝ舟にとり乗て海上に
まよふ　其秋もかはる乃さかせ
とくさげ落葉さにうつろいてしよ
ずいかほるかに秋ハ世さらし楽園乃

住人おかべの六弥太忠澄と
名乃りて六七騎にてあとをおふ
うわ是こそのぞむ所とこそ
おもひ弱乃手綱引うへをは
六弥太好をはしゝとゝ見え両馬の
あひよとり組ちかけは六弥太を
とゝて左さへすつるよ刀に手伐

のけしよ
上 六弥太は心得候
よわりたまへどもふましくて
忠度の右乃ひ肱を討落さ
だ忿侍手ゆるく六弥太をとつて
弓乃たけはかりなげのけ
めしつかひける太まへ人によ
西方に向ひて光明遍照

十方世界念仏衆生摂取不捨と
乃たまひ果も志ことのはのうちにも
ぼくしやあへなくも六弥太
うちをぬきもちて忠度を
うちおとし六弥太ちうとり
おもひやりけたちしやは人涙
情乃数をせ乃事いづれ竹年も

まこしきも月日の字にくもわ
隆ミかくれ見こめな我時雨次
通ふ村紅葉の錦乃ひたし袂れ
哀常印もやもしけりをた海
こ袂ハ歩むうち思ひ中にこう
なほうめ暗出遊かしき所に
錦をこ袂ま御しきや那短冊を

付る机ふるを見出た様宿の影哉
すへり着て衣裳下隠を庭と
をは小雁やこよひ哀あるし
なうましたくの里こ忠袂うわ
椒いうさのひあしし所なをふ
我さらししさ落下隠加見ゆらく
すししお痛りし歩濃男くうち花の

信よふるよわたかひしなげく
物語申さんとそね坂くりし
ゆきこめしなわびけすゑうくのひ
よもやしげ翁ハ秋ま悩るなかや
がめ語とひてうひ竹人来信を
旅乃宿とをはり聞こうあるし
なわ巻秋